

# AI時代、知的労働の主戦場は「現場」に移る

ライフデザイン研究部 主席研究員/テクノロジーリサーチャー 柏村 祐(かしむら たすく)

## 1. 「知能」のコモディティ化がもたらす衝撃

2022年末、ChatGPTの登場はビジネスにおける「能力」の定義を根底から覆した。それまで、情報の収集・整理・分析・文書化といった知的生産活動はホワイトカラーの聖域とされ、人間の知性のみが許された領域だと信じられてきた。しかし今、その前提は崩れ去ろうとしている。かつての産業革命が「筋力」を機械に置き換えたように、現代のAIは私たちが磨き上げてきた「認知能力」や「事務処理スキル」を急速に代替し始めている。これまで企業で高く評価されてきたのは、正確かつ迅速に情報を処理し、論理的なアウトプットを作成する実務能力であった。しかし皮肉なことに、これらのスキルは生成AIが最も得意とする領域と完全に重複してしまった。

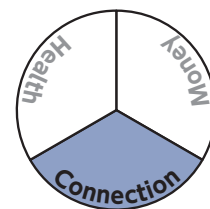
人間がAIの得意な領域で正面から競合することは、キャリア戦略として致命的である。AIが高度な知的作業を「誰でも利用可能なコモディティ」に変えていく中で、人間に残された不可侵の価値とは何か。AIに仕事を奪われる側ではなく、パートナーとして新たな価値を生み出す側に回るためには、どのような変革が必要なのか。本レポートでは、漠然とした不安論を排し、国際機関や最新の研究データに基づいてこの問いへの解を提示する。AI時代を生き抜く鍵は、皮肉にも「脳」だけの労働から脱却し、AIが模倣できない「身体」と「現場」へ回帰することにある。

## 2. 代替されるスキルと拡張される能力の分水嶺

AIが労働市場に与える影響は一様ではなく、仕事を「奪う(競合)」ケースと「助ける(協調)」ケースに二極化している。その境界線がどこにあるのかを、まずは国際労働機関(ILO)が2023年8月に発表したワーキングペーパー「Generative AI and jobs」のデータから読み解く。同レポートが示す職業グループ別の自動化リスク分析によ

れば、事務従事者の仕事はその約24パーセントが高い自動化リスク、58パーセントが中程度の自動化リスクに晒されており、業務の8割以上がAIによって代替可能という衝撃的な事実が示されている。これに対し、専門職や管理職において高い自動化リスクを示す領域はわずか1パーセント程度に過ぎない。これらの職種にとってAIは職を奪う敵ではなく、煩雑な作業を代行する強力なツールとして機能する。つまり、リスクが集中している定型的な事務処理の比率を下げ、AIには手が出せない複雑な現実への対処や人間関係の構築といった専門的・管理的領域へ、仕事の重心を移すことが不可欠であるといえる。

次に、AIの影響を受けることが必ずしもネガティブではない点について、カナダのシンクタンクThe Daisが2025年1月に発表した「Right Brain, Left Brain, AI Brain」の分析を参照したい。同レポートでは、職業をAIへの露出度(関わりの深さ)とAIによる補完性(助けになる度合い)の2軸でマッピングしているが、この散布図を見るとキャリアの安全地帯が浮き彫りになる。特に注目すべきは、AIへの露出度が高いにもかかわらず補完性も高い領域、すなわち「AIを積極的に活用しながらもAIに代替されにくい」職業群である。この領域には、裁判官や弁護士、高等教育管理者といった高度専門職が位置している。対照的に、AIへの露出度は高いが補完性が低い領域には、翻訳者や金融・投資アナリストなどが分布している。これらの職種は、言語変換やデータ分析といった中核業務においてAIが高いパフォーマンスを発揮するため、単なるスキル保持だけでは「AIに置き換えられる」リスクが極めて高い(資料1)。ここから導かれる戦略は、AIと競合しないためにAIから距離を置くのではなく、むしろAIを最大限に活用しつつ、AIだけでは完結できない高度な判断や責任を伴う領域を目指すべきだということである。



### 3. AI時代の生存戦略

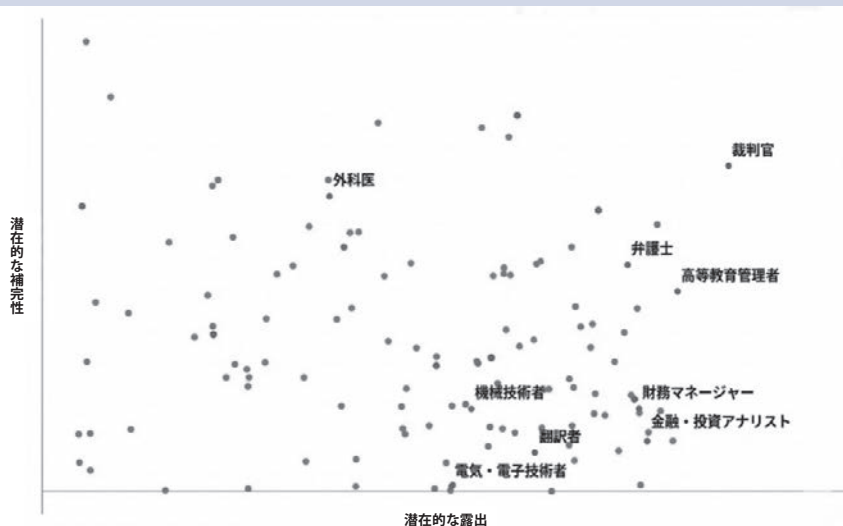
これに基づき、本章では頭脳労働（ホワイトカラー）へ身体性（現場での実践的な経験や知見）を統合するという新たなパラダイムを提示する。まず、人間に残された価値ある仕事とは何かという問いへの答えは、AIがアクセスできない物理的な現実、すなわち現場への介入である。その理論的支柱は、AI研究者ハンス・モラベックが1988年の著書「Mind Children」で提唱したモラベックのパラドックスにある。これは、高度な推論はコンピュータにとって容易だが、知覚や運動といった身体的スキルは極めて困難であるという事実を指す。したがって、私たちが目指すべきは、PCの前から離れ、現場で一次情報に触れる身体性への回帰である。

デビッド・デミングが2017年に「The Quarterly Journal of Economics」で発表した研究によれば、労働市場で最も価値が高まっているのは、高い数理能力と高い社会性スキルを併せ持つ人材である。AIは論理的に正しい正解を瞬時に出せるが、人間社会は感情や政治的力

学で動くため、正論だけでは物事は進まない。そこで不可欠となるのが、AIが出した論理を、人間の感情や組織の文脈に合わせて翻訳し、関係者が受け入れられる形に変換して合意形成を図る能力だ。AIリテラシーという数理的側面と、人間関係の摩擦を調整する社会性という両輪を回せることが、AI時代の必須スキルとなる。

そして最終的に、私たちの役割は作業から編集責任者へと転換しなければならない。自らは問いを立て、現場を走り、人間関係を調整する。その過程で必要なデータ処理や論理構築はすべてAIに行わせ、最終的なアウトプットの品質と結果にのみ責任を持つ。このように、AIと自身の身体性を組み合わせ、仕事全体をプロデュースする編集者となるのが、AIと協働し価値を生み出すための具体的な道筋だ。AIは私たちから仕事を奪うのではなく、情報処理の速さと正確さのみを競う時代を終わらせたに過ぎない。これからの時代、AIという最強の左脳を持ち、人間という身体と社会性で実行するスタイルこそが、新たな価値の源泉となるのである。

#### 資料1 AI露出度と補完性のマップ



(出所) Li & Dobbs (2025). The Dais. (筆者和訳)